

湯川博士の中間子論30周年

世界の頭脳集めて

今秋、京都で素粒子論会議

湯川秀樹博士の中間子論30周年を記念して「素粒子論国際会議」が今秋九月二十四日から京都市左京区岡崎の京都公会館で開催されるとになり、湯川博士から内容が発表された。

会議は日本学術会議と京大基礎物理学研究所の共催で、人数も世界のノーベル賞学者や日本の中堅物理学者など二十数人に限り、費的に高度なものを目標としている。

このためマックス・ボルン博士(西独) ルイ・ド・ブローイ博士(仏) W・ハイゼンベルク教授(独) マックス・テューンク教授(独) パウエル・A・M・デラック教授(英) ケンブリッジ大 I・タム博士(米) 物理学大カデミー(米) C・パウエル教授(英) フリスドル大 O・N・ヤン博士(中) 米プリンストン高等研究所 II 以上ノーベル賞学者や J・R・オッペンハイム博士(米) プリンストン(米) 研所長

日・パパー博士(印) タタ研究所長ら著名な理論物理学者に参加を求め招待状を出した。わが国からは湯川細川委員長のほか朝永敏一郎(学術会議会長) 坂田昌一(名大) 武谷三男(立教大) 小林稔(京大) 谷川安孝(神戸大) 中村誠太郎(東大) 内山龍雄(阪大) 渡辺憲一(IBM研) 研究員(東大) 岡田一郎(米シカゴ大) 研究員(東大) の各氏が参加する。

テーマは非局所場の理論をはじめ素粒子論の模型、S-行列な理論、論物理の根本問題で、これを「世界の頭脳」で検討しようという。日程は六月ごろまで決まる。取りで九月二十四日から二十七日までの間、五日ほどは本会議にあっては世界の著名学者を囲むセミナーやシンポジウム、記念講演会、湯川博士の祝賀会などを予定している。

c073-001-012

京都で国際会議

湯川博士 30周年を記念して

【京都】九月下旬京都市で、日本学術会議主催の「素粒子論国際会議」が開かれると七日、素粒子論国際会議組織委員会(委員長、湯川秀樹(京大)教授)が発表した。この会議は湯川博士の中間子論発表三十周年を記念して開くもの。世界各国の理論物理学者約三十人が集り、素粒子論の基本的問題、将来を話し合う。

日本から湯川博士をはじめ、同会議組織委員の朝永敏一郎(日本学術会議会長)、坂田昌一(名大)、小林稔(京大)、谷川安孝(神戸大)、武谷三男(立教大)の各教授、中村誠太郎(東大)教授らが参加する。

また、具体的なテーマは決っていないが、湯川博士の非局所場理論、素粒子の模型、時間・空間の問題、最近の分散理論、日本で研究の進んでいる核力の問題、さらに

c073-001-013

で考えた。
当時まだ中間子の存在の直接的証拠が全然なかったのに、いつの間にか自信を持ってたのであるから、いかに奇妙である。その後の一二年の間に、私の自信は何度も動揺したが、これまた奇妙である。二年あまりたつてアメリカのアンダーソンが宇宙線中に中間子を見つけたことは、確かに私を勇気づ

で新しい問題がいくつも発生し、私は新しい問題の解決に力を注いで来た。その結果、今日までの様な素粒子に対する、間接的に似ており、中間子論は次の段階へ移りつつあるのである。問題の第一は宇宙線中で見出された中間子の性質の研究が進むにつれて、それを核力の場に伴う中間子と同一視するのが、だんだんとむずかしくなってきたことである。この問題は、しかし間もなく坂田、谷川安孝両氏の「中間子板」によつて、

に新しい問題がいくつも発生し、私は新しい問題の解決に力を注いで来た。その結果、今日までの様な素粒子に対する、間接的に似ており、中間子論は次の段階へ移りつつあるのである。問題の第一は宇宙線中で見出された中間子の性質の研究が進むにつれて、それを核力の場に伴う中間子と同一視するのが、だんだんとむずかしくなってきたことである。この問題は、しかし間もなく坂田、谷川安孝両氏の「中間子板」によつて、

に新しい問題がいくつも発生し、私は新しい問題の解決に力を注いで来た。その結果、今日までの様な素粒子に対する、間接的に似ており、中間子論は次の段階へ移りつつあるのである。問題の第一は宇宙線中で見出された中間子の性質の研究が進むにつれて、それを核力の場に伴う中間子と同一視するのが、だんだんとむずかしくなってきたことである。この問題は、しかし間もなく坂田、谷川安孝両氏の「中間子板」によつて、

c073-001-014